

る消極的ないしは無自覚な「民衆的抗議行動」ととらえることができるのではあるまいか」とする結論には、やはり飛躍を感じざるを得ない。

どこまでを抗議行動と解釈するのか、あるいは何をもって抗議行動とみなすのか、その内実と判断が第5章の長田論文では厳しく問いただされている。戦時下ナチス・ドイツにおいていったい何がどこまで抗議運動だったと見なしうるのかという記憶のポリテクスも含む難しい歴史的問題に、最新の研究成果をおさえながら長田は丁寧にアプローチしている。ここでも浮き彫りにされているのは、「たたかう民衆の世界」というよりも、「たたかいきれない民衆の世界」である。この「たたかいきれない民衆」をどう評価するのかという問題に、おそらく私たちはもっと取り組まなければならないのだろう。この点で示唆的なものとして、ナチス占領下におけるオランダ人のユダヤ人に対する両義的で腑分けし難い態度と行動をサッカーの社会史というかたちで見据えようとしたスポーツ・ジャーナリストS・クーパーの労作「アヤックスの戦争」(白水社、2005年)をあげておきたい。

民衆騒擾をたんなる暴動ではなく抗議行動だとみなす視角は、たとえばイギリスのリューデヤトムスン、ホブズボームらの先駆的研究によって打ち出され広く受け入れられてきた。私たちの民衆的抗議行動の歴史的イメージもたしかにこれらに多くを負ってしまっていると言えよう。第2章の久木論文では第一次大戦前のイギリス・ウェールズにおける反ユダヤ人暴動が取り上げられているが、主要先行研究と一次史料の再検討を通して先駆的諸研究で強調された抗議行動的側面の重要性を相対化しつつ、人種差別を含む長期短期にわたる重層的な要因の重度の詳細かつ慎重な比較をおこない、結論部分では階級に収斂されない共同体という地域的要因が20世紀初頭のイギリスの政治配列にとって重要である証左としてトリディガー暴動を位置づけている。久木はこの暴動を、「自覚的ではなかったもの」階級ポリテクスへの再編という20世紀イギリスの近代化に抗する「異議申し立てであったといえるのではあるまいか」と論じているが、寺田論文同様に、本文でのそれまでの実証性からは離れたある種の過剰な読み込みという感を免れない。評者としては、よりローカルな史料の発掘・利用とともに、「近代化」といういささか覚束ない文脈よりも、南ウェールズにおける前世紀からの民衆騒擾の伝統や、同時代にイギリス各地で多発していたドイツ人、ロシア人、

アイルランド人、中国人に対する反移民暴動の文脈への位置づけがほしかったと思う。

20世紀初頭のスペインにおける農民運動を論じた第3章の岡住論文では、農民組合と雇用主双方の内部の重層構造を明らかにしつつ、地方および中央政府(軍)も介入することになる労働争議の錯綜した交渉過程とその展開が揺るぎなく跡づけられている。おそらく本書のテーマに最もバランスよく追ったケーススタディである。

編者のひとりでもあり、政治思想的アプローチでアメリカ特有の基層政治文化としての自由主義の20世紀史を第7章で論じた中野博文が、「ありていへば、われわれの共同研究もせつかく統一のテーマで研究を進めながら互いに刺激しあうより、すれ違いのまま議論が終わってしまうことが多かった」と率直に「あとがき」に書いているように、対象地域と対象年代を異にする歴史研究者による共同研究は難しい。個々の研究成果とは違わず、何らかの積極的な歴史的知見がひとつの論文集の全体的成果として出されるにはいったいどんなテーマ設定の仕方が必要なのか、そこを問いかけている論文集でもある。

(彩流社、2005年4月、294頁、3,360円)

和田春樹著

## 『テロルと改革 —アレクサンドル二世暗殺前後—』

下里俊行

本書は、近代世界史においてテロリズムが一国の政治に最も大きな影響を与えた事例として、1881年3月1日のロシア皇帝暗殺事件の意味を真正面から扱った世界的水準の本格的著作である。内容的には、テロ激化の中で抜擢されたロリス＝メリコフ伯爵の改革案をめぐる政治過程に焦点をすえ、政権中枢の人々の性格と感情の機微や個々の出来事の臨場感ある描写などを交え、生き生きとした筆致で綴った読み応えある見事な歴史物語となっている。

事件は、1866年以来絶えて久しかった皇帝へのテロが十数年ぶりに甦ることから始まる。宮殿前を散歩中の皇帝を元教師の革命家が至近距離から狙撃したのである。未遂に終わったこの事件は政権中枢を震撼させたが、その対策は旧態依然の治安強化に

終始した。だが、お召し列車の爆破や宮城爆破へとテロがエスカレートする中で、カフカス戦争や地方社会の騷擾鎮撫で名をあげたアルメニア人の軍人ロリス＝メリコフ伯爵が抜擢され、彼に治安対策の全権が委任される。自由主義的な信条を持っていた彼は、皇帝・皇太子・有力大臣らの支持を巧みに取りつけながら自己の政治基盤を強化するなかで内相に就任し、とうとう偽装されたかたちであるとはいえ「立憲制への第一歩」となりうるような改革案への承認を皇帝から引き出す。だが、その直後に皇帝は革命家が投げた爆弾によって暗殺され、内相の改革案も動揺する新帝によって再議にかけられる。その時、決起したのが保守派のポベドノスツェフだった。彼は新帝に対して改革案を偽装した立憲主義だと告発する。新帝の信を得て彼が起草した専制護持詔書が發布され、ロリス＝メリコフら改革派閣僚が辞任することで、19世紀ロシアでの立憲制への道は閉ざされる。

皇帝暗殺とロリス＝メリコフの改革案は、かつてソ連でレーニンの革命情勢論の枠組みで研究されたが、最近の欧米・ロシアの研究では滞納・飢饉・伝染病など当時の地方社会の混乱といった地方統治・行財政問題との関連や、リベラル世論での代議制の要求との関連で論じられており、改革挫折後の「反改革」の時代にあってもロシアが法治国家と市民社会の方向に進化する傾向は変わらなかったという議論までも登場している。他方、わが国では、大改革時代を中心に法制度史や農村と都市の社会史、革命派やリベラルなど様々な思想史の分野で一定の研究蓄積があるものの、総じて皇帝とその側近からなる頂上政治史と本格的に切り結ぶ姿勢は弱かった。それゆえ、ナロードニキ研究の名著をもち各種通史の編者である和田氏がこの事件を取り上げたことは、革命的テロリズムの意味の再吟味だけでなく広義の政治史の再構築を展望したものと受け止めることができる。

本書の基本部分は著者が1962年に「スラヴ研究」に発表した論文「ロリス＝メリコフの改革案とツァーリズム」（以下、「旧論」と略す）に基づいている。新たな部分は、一連の皇帝暗殺未遂事件の顛末と政府の対応、皇帝の愛人で後妻となったユリエフスカヤへの注目などだが、以下では本書と旧論を対比させながら論点を限定して紹介してみたい。

旧論は、主としてロリス＝メリコフの改革案の準備と清算の過程を解明したものだが、レーニンの革命情勢論を踏まえつつ、ロシア資本主義が帝国主

義段階にはいる19世紀80年代から20世紀初頭のロシアの国家権力としてのツァーリズムの性格分析という課題を掲げていた（旧論：89頁）。当時の歴史学界の文脈で敷衍すれば、ロシア帝国主義の上部構造の階級性の解明という問題意識があったといえよう。だが、本書では、客観的情勢というよりもむしろ権力中枢の人々の意識に現象した限りでの情勢認識や諸々の主観的要因が旧論にも増して前景に押し出されている。本書に満ち溢れているのは個々の政治家達の信条・行動様式・政策意図といった思想的次元と性格・気分・雰囲気・感情・意志といった心性に関わる次元の表現である。この点に、社会経済的な構造変動や社会心理の情況的变化を踏まえつつも、何よりも政治過程の中での実存的な個々人の内面に強く光を当てようとする著者の明確な姿勢を看取することができる。これは、既に旧論でも先駆的に主張されていた、ソ連史学の客観主義的・図式主義的アプローチに対する著者独自の方法的立場を徹底させ洗練させた結果であるといえる。特筆すべきは、日記・書簡等からの心象読解の精妙さのレベルがロシアの同僚達を遙かに上回っている点である。43年前に公刊史料だけで成し遂げた成果をこんにち改めて上梓しようとした著者の自負は十分根拠あるものであり、このことは特に強調しておきたい。

和田氏は、ロリス＝メリコフの思想について4つの要素を指摘している。第1に、アルメニア人太守の末裔としての彼にとって「ロシア」とは19世紀までに帝国に併合された諸民族・諸地域を含む「全ロシア帝国」であったこと。第2に、貴族主義の欠如と平民性。第3に、ツァーリ個人に対する宗教的忠誠心の不在と一定の立憲制を志向した自由主義。第4に、戦術としての曖昧性・不明瞭性を利用する策略の機知である。また彼の改革案に関して、皇帝を非政治化させつつ「公衆」の政治参加を目指した点で「主唱者の主観的意図としては立憲制への第一歩であって、国内政治情勢のいっそうの先鋭化という条件があれば、歴史的、客観的にそのような意義をもちえらう」と結論づける。たしかにロリス＝メリコフ自身は何度も西欧的代議制への反対を言明していたが、著者はこれを改革への抵抗を切り崩すための「政治的発言」であり、彼の改革案は明確な政治的意志に基づく「偽装した改革」だと解釈する。本書から浮かび上がるのは、皇帝よりも全ロシア帝国の一体性を重視しつつ巧妙な策略を駆使して偽装したかたちでの立憲制をめざした穏健な自

由主義者というロリス = メリコフ像である。このイメージは、専制統治の改善をめざした実務派官僚といった先行研究でのイメージとは対照的である。今後、自由主義や立憲制といった政治概念の精密化が求められるところである。特筆すべきは、ロリス = メリコフの政治力の一つとして隠蔽された形でユリエフスカヤの支持があり、皇帝も宮廷で孤立していた「新しい家族」を案じて暗殺から生き延びるのに役立ちそうなこととして改革案を受け入れたとする新解釈である。宮廷での女性や親族関係を専制政治における重要なファクターと位置づける本書の視点は、新しい政治史にとって不可欠である。

本書がいうように度重なるテロルが皇帝の心を追いつめ、改革案への淡々の同意をもたらしたことは明らかだが、暗殺成功後も新たなテロルの恐怖が新しい皇帝を脅かし続けたという指摘は重要である。それゆえ、テロルの成功が改革の可能性を完全に閉ざしたと見るのは微妙だろう。ロシアの歴史家ブドニツキイも指摘するように、ロリス = メリコフはテロルの脅威を背景に実権を握ったのである以上、革命党の壊滅状態が明白となりテロルの脅威が解消されるとともに彼の改革案の実現可能性だけでなく、彼の権力自体の根拠も喪われる。「革命運動が清算される時、国内の政治的緊張が解ける時、専制の制限の志向をもつ政治制度改革を実現せんとする政府部内の改革派が専制擁護派を抑える切り札は失われるのである」(296頁)。ここに、改革への外圧となったテロルの現実的な脅威が消失するとともに政府内の改革推進力が失速するという「テロルと改革」をめぐる政治力学を見ることが出来る。この点こそ、本書の核心部分の一つである。

後続するテロルが予想され流動的な事態の中で専制維持の詔書が発布されるまでの過程では、改革に反対する宗務院長ポベドノスツェフが熱心に新帝に巻簡を送り続け、動揺する新帝をめぐる新たな信任獲得ゲームにおいて彼が主導権をとる様子が丹念に描かれる。旧論では、同詔書の意義を「従来通りの」無制限君主が存続したとし、権力の質的連続性を示唆していたが、本書では、詔書が大臣達との協議なしに皇帝の私的な顧問の助言に基づいて発布された点を重視して、大改革時代の大臣達の議に基づく統治から大臣協議を経ない「文字通りの無制限専制に戻った」(313頁)と述べ、ポベドノスツェフの「クーデタ」説を正しいと見る。だが、アナニイチ編『権力と改革』が指摘したようにアレクサンドル2世も塩税廃止勅令など事前審議なしの独裁的決定

を好んだことを考えれば、ポベドノスツェフの思想を含め「専制」概念の再検討が求められよう。

ここで、評者は、和田氏が旧論で掲げた次の2つの問題に立ち返ってみたい。第1に、当時の政治家達が用いていた「公衆」とは何を指すのか、第2に、80年代のツァーリズムは国内政治情勢の先鋭化の基盤をなす社会矛盾をどのように処理したのか、という問題である。いずれも専制権力の社会・政治的基盤に関わるものである。本書の叙述では「公衆」の間で専制権力の制限を要求する政治勢力は微々たるもので、明確な意志表明は一握りの知識人とどまり、政府が脅威を感じていたのは革命党の次なるテロルだけだったという印象を受ける。それゆえ、専制権力の実体はまるで特定の社会層に根拠を持たない一群の官僚組織と軍事・治安機構から成る「空中楼阁」のように見える。だからこそ、一握りのテロリストの威嚇の前に激しく動揺し、また個々の熱意ある輔弼者達によって国政の軌道が転変したとも言えるかも知れない。しかし、後に有力な政治勢力に結集する地方自治体活動家や、皇帝とナロードの間に形成された都市の市民社会的要素に関する最近の研究動向を見る時、43年前に和田氏が提起したツァーリ権力と社会構成体との関係という問題の解明は依然として大きなテーマでありつづけているし、近年では、諸々の地域・民族統合問題、「愛民政策」やヴィッテの積極的経済政策、ロシア・リベラルの専制的福祉国家論などへの関心も高まっている。それゆえ、本書は対象を複雑で広範な権力-社会関係の頂上部分だけに限定しているようにも見える。だが、本書の究極的な狙いは、もっと一般的な「政治的なもの」の精髓に向けられているように思われる。公共での自由な言論が抑圧された時空間での極限的な事例を素材にしつつも、政治意志をもつ数多の行為者が可変的な人間心理に働きかけるべく用いた物理的力と言葉の力の複雑な相互作用を克明に描写した著者の姿勢からは、「敵」の殲滅をめざす二元論的な闘争ではなく、ブルリズムに基づくコモンセンス形成過程としての政治への希望が伝わってくる。本書により新しい政治心性史のための橋頭堡が築かれたことは疑いない。

(山川出版社、2005年8月、326+62頁、3,675円)